

日本英文学会関西支部

第 20 回大会資料

プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2025 年 12 月 13 日（土）11：00 より

会場：摂南大学寝屋川キャンパス（〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8）

日本英文学会関西支部事務局

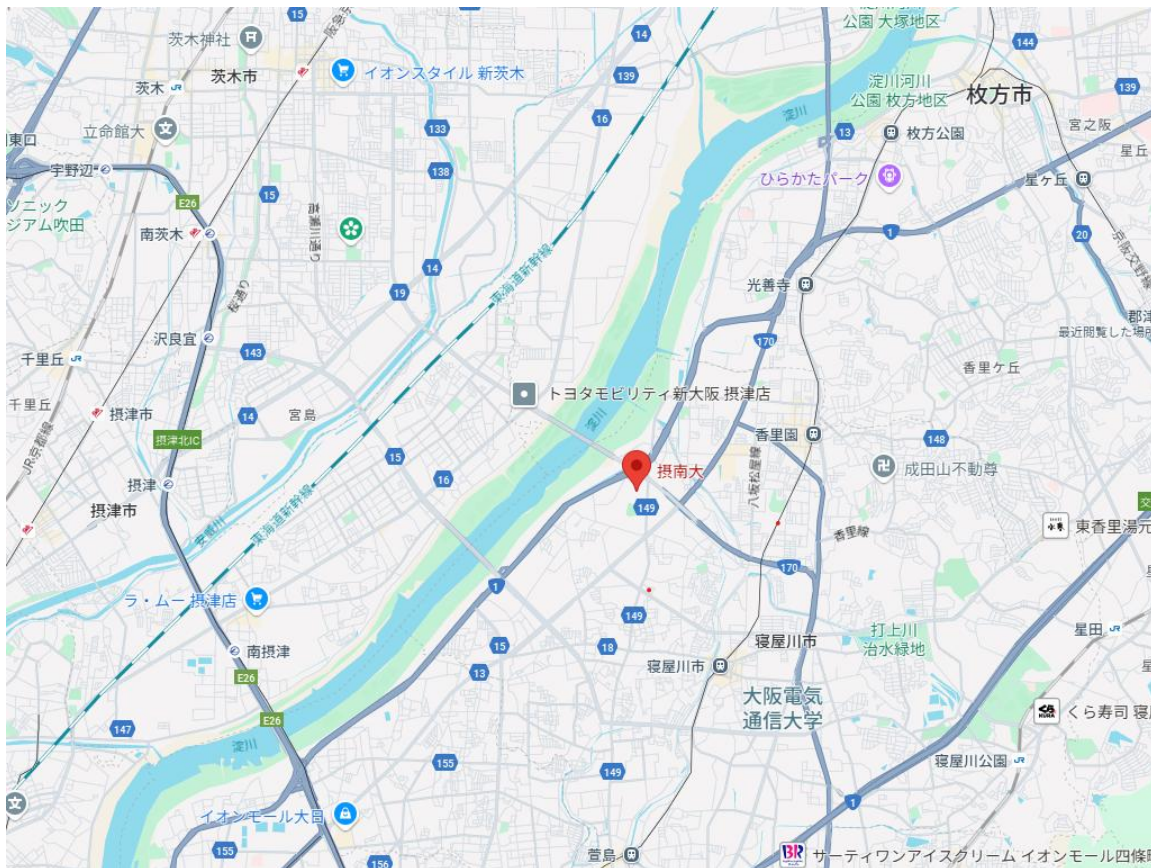
〒662-8501

兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学文学部横内一雄研究室内

E-mail: kansai2@elsj.org

会場（摂南大学寝屋川キャンパス）までのアクセス



- 1) 京阪本線・寝屋川市駅まで：JR 大阪から約 19 分
JR 環状線外回りで京橋駅へ⇒京阪電車に乗り換え寝屋川市駅へ

京阪本線・寝屋川市駅から：約 15 分。京阪バス「西口 3」乗り場より乗車、「摂南大学」下車。
- 2) JR 京都線・茨木駅から：約 30 分。京阪バス「JR 茨木東口 1」乗り場より乗車、「摂南大学」下車。
- 3) 阪急京都線・茨木市駅から：約 25 分。京阪バス「阪急茨木南口」乗り場より乗車、「摂南大学」下車。
- 4) 大阪メトロ・大阪モノレール・大日駅から：約 15 分。京阪バス「大日駅 0」もしくは「大日駅 1」乗り場より乗車、「摂南大学」下車。

※学会当日は駐車場が使えません。公共交通機関でお越しください。

会場構内案内図



大会会場 (10号館) 5階、6階、7階

*大会会場の10号館に入りましたら、5階エレベーターホールの大会受付にて参加者名簿にご記入をお願いします。受付は10時30分開始です。なお、当日の年会費の受付はいたしません。事前のお振込みをお願いします。

*2号館にコンビニ及び食堂があります。また、大学近辺にもコンビニがあります。ゴミなどは必ずお持ち帰りください。

*急な変更が生じた場合は関西支部 HP で案内いたします。支部サイトの学会情報も随時ご確認ください。
(<https://www.elsj.org/kansai/>)

また、本大会についてのお問い合わせは学会事務局のメールアドレス（表紙に記載）までお願いします。

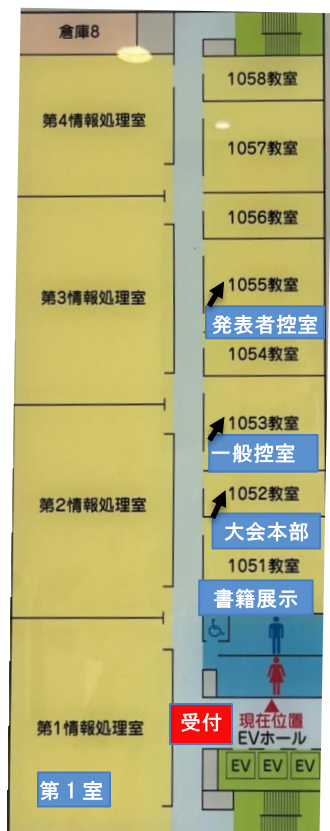
懇親会

懇親会は大学近くの店で行われる予定です。事前予約制。詳細は9月末に関西支部 HP にてお知らせいたします。懇親会参加をご希望の方は関西支部 HP をご確認の上、11月14日までに手続きしてください。

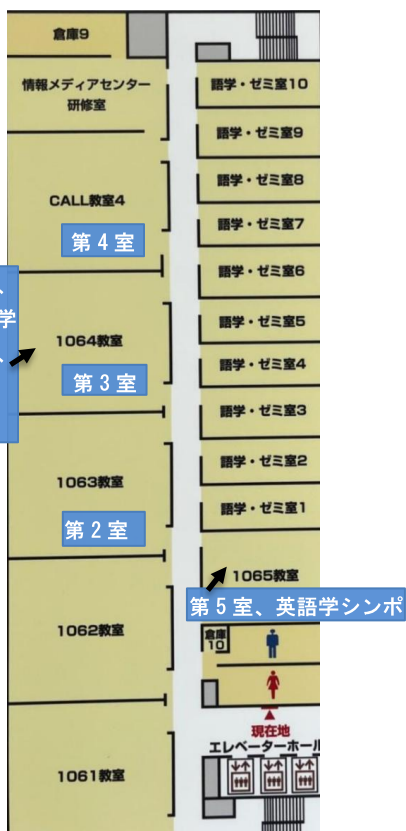
大会参加に伴う外部の託児サービスの利用における補助金について

本大会では開催校での託児サービスの提供が出来なくなりました。代わりに、本大会に参加される会員が大会当日に外部の託児サービスを利用された場合、その援助を行うこととしました。補助金の申請に関する詳細は9月中に関西支部 HP にてお知らせいたします。

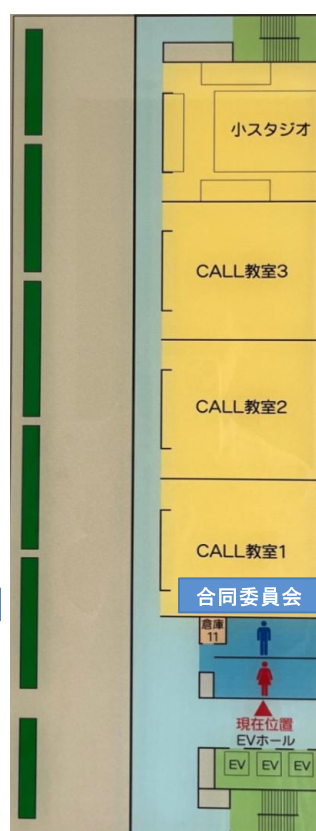
教室案内図 ※ 大会受付は（10号館）5階にありますのでご注意ください。



10号館5階



10号館6階



10号館7階

日本英文学会関西支部第 20 回大会プログラム

日時：2025 年 12 月 13 日（土）11：00 より

会場：摂南大学寝屋川キャンパス（〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8）

大会受付 10：30 より（10 号館 5 階エレベーターホール） 受付、懇親会費納入

開 会 式 11：00 より（10 号館 6 階 1064 教室）

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 横内一雄

研究発表 第 1 発表 11：10～11：50 第 2 発表 11：55～12：35
第 3 発表 13：30～14：10 第 4 発表 14：15～14：55

第 1 室（10 号館 5 階第 1 情報処理室）

司会 京都教育大学教授 奥村真紀

1. Jane Austen 小説における「書き物」を読む

京都大学大学院生 杉野久和

司会 大阪大学特任助教 中村瑞樹

2. Destabilization of Human Identities and Disorientation of Their Intersubjective Network:
A Lacanian Reading of Philip K. Dick's *A Scanner Darkly*

神戸大学大学院生 Park Junghwan

司会 神戸大学教授 山本秀行

3. *Memoirs of a Geisha* における Hatsumomo の自己崩壊と芸者制度下の女性像

京都産業大学講師 陳懌懿

司会 関西学院大学教授 高村峰生

4. 【招待発表】“God, whose hand the Puritan sees”—ピンチョンにおける神の種類

大阪大学教授 石割隆喜

第 2 室（10 号館 6 階 1063 教室）

司会 立命館大学教授 竹村はるみ

1. 宝塚歌劇団『暁のローマ—『ジュリアス・シーザー』より—』におけるホモソーシャルティ

神戸大学大学院生 山口ひかり

2. エドモンド・スペンサー『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender*) と *The Kalender of Shepherdes*
—文学ジャンルとしての「暦」

同志社大学助教 円浄ゆり

司会 龍谷大学教授 川島伸博

3. 『ハディントン卿の仮面劇』におけるエロティシズムの政治学

関西学院大学研究員 西田侑記

司会 京都大学教授 栗山智成

4. 理解不可能な語りに向き合う—ハロルド・ピンター『灰から灰へ』における聞き手の考察

神戸大学大学院生 阿部万里亜

第3室 (10号館6階1064教室)

司会 奈良女子大学教授 市川千恵子

1. *Belinda* におけるギャンプル—テキスト改変の意味

関西学院大学大学院生 樽磨早紀

司会 近畿大学教授 西垣佐理

2. 【招待発表】病、迷信、戦争、モダニティ
—森鷗外「金毘羅」とコンラッド『陰影線』における近代的主体と二重視

関西学院大学教授 伊藤正範

司会 滋賀大学教授 真鍋晶子

3. アイルランド文学ルネサンス期 (19世紀末から20世紀初頭) において再創造された国家象徴に
投影される近代性と原始性

関西学院大学大学院生 富田璃楽

4. 複合的象徴としての聖母マリア—W. B. イェイツ『葦間の風』(1899年)における英国デカダンスと
アイルランドの異教的想像力の交錯

京都大学大学院生 岡田咲

第4室 (10号館6階CALL教室4)

司会 関西学院大学教授 松宮園子

1. 「非在」である外国人メイドの語り—Hilary Mantel の“The School of English”における言葉の不自由さ
大阪大学大学院生 梅川桂子
2. カズオ・イシグロ『クララとお日さま』における、人間とロボットの境界
京都先端科学大学専任講師 高橋一馬

司会 京都大学准教授 南谷奉良

3. 【招待発表】「ビッグ・ブラザー」としての “Tiger”
—ジョージ・オーウェルの『一九八四年』／Haruki Murakami's *IQ84* における指導者／小説家の肖像
京都大学教授 小島基洋

司会 京都府立大学教授 吉田朱美

4. 死刑を恐れるドリアン・グレイ—オスカー・ワイルドの犯罪者表象における社会的制裁への恐怖の導入
同志社大学大学院生 高山蒼馬

第5室 (10号館6階1065教室)

1. (発表なし)

司会 京都女子大学教授 松原史典

2. 英語の[V at N]構文の意味の広がりに関する一考察
大阪大学助教 田尾俊輔

司会 龍谷大学教授 五十嵐海理

3. something の記号化に関する関連性理論的考察
大阪工業大学准教授 黒川尚彦

4. 【招待発表】形式的変異現象への構文文法的アプローチ
神戸大学准教授 南佑亮

シンポジウム 15:10～17:30

英米文学部門 (10 号館 6 階 1064 教室)

偉大な小国イギリス?—大陸からの脅威と大陸を越える覇権

司会・講師	大阪大学教授	橋本順光
講師	東京学芸大学教授	大田信良
講師	同志社大学教授	川島健

英語学部門 (10 号館 6 階 1065 教室)

言語の比較対照から分かること

司会・講師	兵庫教育大学教授	中村浩一郎
講師	龍谷大学准教授	工藤和也
講師	東洋学園大学教授	依田悠介

総会 17:30 より (10 号館 6 階 1064 教室)

閉会式 17:50 より (10 号館 6 階 1064 教室)

挨拶 日本英文学会関西支部副支部長 芦津かおり

懇親会 18:20 より

(大学近隣の店舗で開催する予定。詳細、及び会費については9月末に関西支部 HP に掲示します。)

研究発表要旨

第1室 (10号館5階第1情報処理室)

第1発表 (11:10 より)

司会 京都教育大学教授 奥村真紀

Jane Austen 小説における「書き物」を読む

京都大学大学院生 杉野久和

Jane Austen の小説を魅力的にしている一因は、間違いなく登場人物たちの「会話」である。一方で、処女作から遺作に至るまで一貫して用いられる「書き物」——遺書、手紙、新聞、準男爵名簿など——にも注目すべき意義がある。たとえば、謎めいた手紙が読者の関心を惹きつけるページターナーとして機能するだけでなく、作品の冒頭において手紙によって転居する主人公たちが描かれて物語が展開するなど、「書き物」は物語展開と密接に結びついている。本発表では、作中の要所で読者に「提示」される新聞などの「書き物」に焦点を当て、Austen が「音読」と「黙読」を使い分けていたこと、および、その意義を明らかにしたい。さらに、準男爵名簿のように、提示されながらも、読者の共感をあえて阻むような仕掛けが意図的に施されている点にも着眼し、その効果についても考察を試みる。そのうえで、英文学史における Austen の先駆性に言及する。

第2発表 (11:55 より)

司会 大阪大学特任助教 中村瑞樹

Destabilization of Human Identities and Disorientation of their Intersubjective Network: A Lacanian Reading of Philip K. Dick's *A Scanner Darkly*

神戸大学大学院生 Park Junghwan

In *A Scanner Darkly* (1977), Philip K. Dick (1928-82) explored themes of his characters trapped in the roles they unwittingly play, created by intersubjective relations. The novel portrays a dichotomy of increasing new identities, their blurring, and ultimately, the complete annihilation of all identities. Its society systematically destabilizes its subjects' identities to make them subservient by disorienting their intersubjective network. Using Jacques Lacan's theory of psychoanalysis, this study will examine how the society depicted exerts psychological control over its subjects and explore how Dick portrays hope in a world that inflicts "punishment beyond belief" on its subjects.

第3発表 (13:30 より)

司会 神戸大学教授 山本秀行

Memoirs of a Geisha における Hatsumomo の自己崩壊と芸者制度下の女性像

京都産業大学講師 陳懌懿

Arthur Golden の小説 *Memoirs of a Geisha* (1997) は、主人公 Sayuri の成功物語として広く知られているが、本発表では、その対照的存在である Hatsumomo に焦点を当てる。従来、Hatsumomo は“悪役”として描かれて

きたが、本発表ではその固定的な解釈を再考し、彼女の自己崩壊（self-destruction）を「芸者制度下における女性像」の一側面として捉え直す。Hatsumomo は、美貌と芸によって一時的な成功を収めるが、構造的制約や新しさが重視される芸者社会において、常に地位の不安に晒される。加えて、既婚男性との関係に見られるように、「愛されたい」という感情を抑圧され、内面の分裂を深めていく。さらに、Sayuri や Mamecha への敵意や Pumpkin の利用といった攻撃的行動は、Adler の「過剰補償（overcompensation）」理論に照らし、劣等感の反映として読み解ける。本発表は、Hatsumomo の崩壊過程を通じて、芸者制度が女性に求める役割と感情の間に生じる矛盾が、彼女の精神をいかに蝕んだかを明らかにし、成功物語の陰に沈んだもう一つの女性像を照らし出すことを目的とする。

第4発表（14:15 より）

司会 関西学院大学教授 高村峰生

【招待発表】“God, whose hand the Puritan sees” —ピンチョンにおける神の種類

大阪大学教授 石割隆喜

『メイスン&ディクソン』の“Star-Gazer”の一人、ディクソンはケープタウンでの金星の太陽面通過の観測について「造物主の働きを見ることであった」と語り、神の栄光をたたえる言葉を口にする。しかしそれに先立ち、観測地へと向かう途上で自らの乗ったフリゲート艦がフランス艦から激しい攻撃を受けたとき、彼の相棒のメイスンは神について“His purposes unknown”と語っていた。ここで一つの疑問が生じてくる。天空に見られる神はその栄光をたたえられるのに対し、それより下の領域で生じる人間的出来事に関わる神はなぜ同様に賛美されず、「わからない」という当惑を引き起こしてしまうのか。神の異なる現れ方というこの問題を、『重力の虹』を併せて読むことで考えたい。なぜなら『重力の虹』において、神を見ることは世俗と結びついていると読めるのであり、この点の検証のため、マックス・ヴェーバーを通じて主人公スロースロップのピューリタンの祖先を再考することも行う。

第2室（10号館6階1063教室）

第1発表（11:10 より）

司会 立命館大学教授 竹村はるみ

宝塚歌劇団『暁のローマ—『ジュリアス・シーザー』より—』におけるホモソーシャルリティ

神戸大学大学院生 山口ひかり

宝塚歌劇団（以下宝塚）月組公演『暁のローマ—「ジュリアス・シーザー」より—』（2006年）は、シェイクスピア劇をロック調に翻案したものである。本翻案では、幕が下りて漫才のような短い会話を挟んだ後に、華やかなフィナーレが追加されている。その時、スターの証として銀橋で歌うのが、カエサル（シーザー）とブルータスである。『ジュリアス・シーザー』は男たちの群像劇であるが、宝塚版においては、このフィナーレが端的に示すように、カエサルとブルータスの人物造形と関係性に特に重きが置かれている。

シェイクスピア原作において、シーザーが倒れる時の「お前もか、ブルータス」という台詞は有名であるが、同様にブルータスの最期の言葉はシーザーに向けられている。シーザーの亡霊がブルータスの前に現れる場面もまた、二人の関係性を示す重要な場面である。本発表では、シェイクスピア原作と宝塚版のそれぞれが、上記の場面において、シーザー/カエサルとブルータスのホモソーシャルな関係性をどのように表象しているかを明らかにする。

第2発表(11:55より)

エドモンド・スペンサー『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender*)と*The Kalender of Shepherd*—文学ジャンルとしての「暦」

同志社大学助教 円浄ゆり

スペンサーの初期代表作『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender*)は、ウェルギリウスの『牧歌』の形式に倣った牧歌詩であるが、牧歌詩というジャンルだけでは収まりきらない複雑な要素を備えている。各月の冒頭は版画と梗概に始まり、多種多様な詩形で牧歌が歌われた後には、エンブレム(emblem)と称される格言と、E.K.と名乗る人物による注、エンブレムの説明が続く。このように『羊飼いの暦』には本編である牧歌以外の付随要素が多く、総じて雑録(miscellany)の様相を呈している。特にエンブレムは作中19回登場するが、大部分が英語以外の言語で記され、作品の雑記性を強めている。『羊飼いの暦』の雑録としての一面は、中世から続く「暦(almanac)」の影響が見られるのではないか。本発表では、1490年代にパリで出版され、16世紀には英訳が普及した*The Kalender of Shepherd*を例にとり、「暦」に見られる雑記性について検討し、スペンサーが詩人としてのキャリア形成の第一歩に「暦」を選んだ意義について考察する。

第3発表(13:30より)

司会 龍谷大学教授 川島伸博

『ハディントン卿の仮面劇』におけるエロティシズムの政治学

関西学院大学研究員 西田侑記

ベン・ジョンソンの『ハディントン卿の仮面劇』は、テキストを執筆当時の歴史的文脈に位置づけるいわゆる時事的読解(topical reading)を旨とする近年の仮面劇研究において、ほとんど一様に等閑視されてきた感がある。スコットランド出身の廷臣であるハディントン卿ジョン・ラムゼイとサセックス伯の令嬢エリザベス・ラトクリフの婚姻を言祝いだこの仮面劇は、典型的な貴族の結婚賛歌として解釈される傾向が強く、劇中で交錯する政治的な言説については、あまり精査されてこなかった。その結果、二人の結婚の背景に潜む、イングランド人とスコットランド人との宥和をめぐる宮廷政治の力学が批評の視界から遠のいてしまった印象は否めない。本発表では、従来の研究が看過していたこうした点に光を当てるべく、国王ジェームズ6世兼1世主導による国家統合事業という巨視的な視座から、『ハディントン卿の仮面劇』が有する政治的意義とその時事性を詳らかにしてみたい。

第4発表(14:15より)

司会 京都大学教授 栗山智成

理解不可能な語りに向き合う—ハロルド・ピンター『灰から灰へ』における聞き手の考察

神戸大学大学院生 阿部万里亜

『灰から灰へ』(*Ashes to Ashes*;1996)において、作者ハロルド・ピンターは現在に生きる私たちが、ホロコーストを初めとする過去の出来事や歴史をどのように認識し、そこからどのような影響を受けているのかという問いを追求している。Rebeccaとその夫と思わしき Devlin の会話を中心に展開する劇において、Rebeccaは自らが体験していないはずのホロコーストを彷彿とさせる記憶を語る。それを聞いて困惑した Devlin は彼女の語りを止めようとして失敗する。本発表では現在の私たちが過去の出来事にどのように向き合うべきかについて考察するために Rebecca に対する Devlin の反応に着目する。Devlin は Rebecca に質問を投げ掛け、

観客は彼とともに Rebecca の返答に耳を傾ける。観客と似た立場にいる Devlin について考察することは、現在の私たちが過去の出来事に向き合う姿勢を見つめ直すことに繋がる。

本発表において『灰から灰へ』は Devlin が Rebecca とのコミュニケーションに失敗する様子を通して、自らが体験していないトラウマ的な出来事を自らの理解の範囲内に歪め、それでも理解できない場合は、出来事に向き合うこと自体を拒絶する Devlin の態度を批判する劇であることを論証する。そして、劇が Devlin と似た立場にいる観客に、過去に起きた出来事に対し、それがたとえ理解を越えた出来事であったとしても、耳を傾ける姿勢を求めていることを示したい。

第3室 (10号館6階1064教室)

第1発表 (11:10より)

司会 奈良女子大学教授 市川千恵子

Belinda におけるギャンブル—テキスト改変の意味

関西学院大学大学院生 樽磨早紀

アイルランドの女性作家 Maria Edgeworth の長編小説 *Belinda* は、1801年に出版されてから複数回の改訂が行われた作品であるが、改訂に伴って異人種間の結婚の可能性を徹底的に阻止するという改変が行われている。これらの書き換えには作家の父で著述家でもある Richard Lovell Edgeworth の影響が大きいと考えられ、*Belinda* の最終版では、物語から削除された箇所を補い物語の辻褄を合わせるための、Edgeworth による大幅な加筆部分が存在している。本発表においては、Edgeworth 自身がどのように加筆を行ったかに注目したい。*Belinda* においては、物語の全編を通して、結婚や恋愛の駆け引きをギャンブルに喩えたり、実際にギャンブルに興じたりする場面が多々存在するが、そういった作品を構成する娯楽としてのギャンブルは、*Belinda* の最終版では結婚を左右する問題にまで昇格している。もともと作品に散りばめられていたギャンブルというモチーフは、娘の作品を書き換えようとする父親の力に対してどのように作用しているのか、検証を行いたい。

第2発表 (11:55より)

司会 近畿大学教授 西垣佐理

【招待発表】病、迷信、戦争、モダニティ

—森鷗外「金毘羅」とコンラッド『陰影線』における近代的主体と二重視

関西学院大学教授 伊藤正範

森鷗外の短編「金毘羅」(1909)は、学術講演で四国を訪れた主人公が、標題の神社へ参拝することなく帰京した後、幼い次男を百日咳で亡くすまでを描いた物語である。作者自身が経験した家族的悲劇をもとにしたこの物語からは、理性と迷信との狭間で揺れ動く近代的主体の姿がまざまざと浮かび上がってくる。船内でのマラリア蔓延に悩まされる新米船長を描いたジョウゼフ・コンラッドの『陰影線』(*The Shadow-Line*, 1917)でもまた、水葬に付された前船長の呪いを頑なに信じる一等航海士との対峙を通して、迷信から理性への関を越えていこうとする近代的主体が描き出される。植民地の覇権を争う二度の戦争に軍医として従事した鷗外と、第一次世界大戦へと出征する自らの長男を見送ったコンラッドは、亢進する帝国主義が行き着いた世界戦争を経て、近代化への急迫性とどのように対峙していったのだろうか。病と死に直面する個が、合理的近代と呪術的過去とを二重視しながら、両者の境目としての「陰影線」をそれぞれの形で跨ごうとする姿を捉えていく。

第3発表 (13:30 より)

司会 滋賀大学教授 真鍋晶子

アイルランド文学ルネサンス期（19世紀末から20世紀初頭）において再創造された国家象徴に 投影される近代性と原始性

関西学院大学大学院生 富田璃楽

アイルランド文学ルネサンス（19世紀末から20世紀初頭）の作家にとって、英国の支配は自国の「去勢」として捉えられ、独立は国家の男性性の回復にかかっていた。英国によって構築された原始的な国家という印象を覆すために、作家たちは理性と権威に基づく近代的な男性性の印象を構築することを試みた。この男性像を体現する国家の象徴として再創造されたのが、ケルトの英雄 Cú Chulainn である。作家 Standish O'Grady は、英雄の翻案を複数執筆しており、1894年の作品においては、理想とされた男性像が顕著に反映されている。その一方、1878年や1880年に出版された翻案作品においては原始的な側面が描かれ、ケルト性の重要性が着目されている。O'Grady の翻案作品を通じて、国家の象徴として再創造された Cú Chulainn に投影される複雑な人物像を考察し、アイルランドの国家アイデンティティに存在するケルト的なものの構築性を探求する。

第4発表 (14:15 より)

複合的象徴としての聖母マリア—W. B. イェイツ『葦間の風』（1899年）における 英国デカダンスとアイルランドの異教的想像力の交錯

京都大学大学院生 岡田咲

W. B. イェイツが詩集『葦間の風』（1899年）で描き出した聖母マリアは、同時代の英国デカダンス詩における理想美の体現やカトリックの伝統的図像の延長線上にありながら、アイルランドの異教的想像力に憧れ、神秘主義に耽溺した詩人独自の宗教観と彼自身の個人的恋愛体験が重ねられた複合的象徴として現れている。しかしイェイツ作品における聖母の表象を本格的に論じた研究は少なく、フェミニズムや政治的・思想的な文脈における断片的な言及にとどまっている。本発表ではイェイツの宗教観の特異性に注目しつつ、聖母とその伝統的象徴である薔薇と百合に関して言及されている『葦間の風』収録作品を精読する。それにより、英国デカダンス詩人の描いたものとは異なる宗教的文脈のうちに置かれた聖母が、当時のイェイツにとっての美的・宗教的・個人的関心事を集約した、多層的な意味作用を担う存在であったことを明らかにする。

第4室 (10号館6階CALL教室4)

第1発表 (11:10 より)

司会 関西学院大学教授 松宮園子

「非在」である外国人メイドの語り —Hilary Mantel の“The School of English”における言葉の不自由さ

大阪大学大学院生 梅川桂子

Hilary Mantel (1952-2022) 晩年の短編小説“The School of English” (2015)において観察される外国人ハウスメイド Marcella の「非在」に着目し、雇用先の家庭内で承認されない存在である Marcella が英語で意思疎通する不自由さについて考察する。移民の Marcella は、職に就くために必要な英語力の証明書を常に携帯し、住処を確保するために住み込みのメイドとして働いている。雇用先の家族や執事との会話の中で、意見をす

れば怒りを向けられ、発言したいことは飲み込まざるを得ないが、望まない内容の説明は強要されてしまい、相互理解可能な会話をすることはできない。そればかりか、雇用先家族の長男からの暴力を恐れる Marcella は、悲劇的な身の守り方を試みることになる。Mantel は性別や人種、階級間の格差を多くの作品において示しており、本作でも「非在」側の視点から物語を構築している。本発表では、自分の存在に敬意を払われない Marcella にとっての言葉や文字の不自由さ、また行動や身体に残される痕跡が語ることにについて解釈を試みたい。

第2発表 (11:55 より)

カズオ・イシグロ『クララとお日さま』における、人間とロボットの境界

京都先端科学大学専任講師 高橋一馬

カズオ・イシグロの『クララとお日さま』(*Klara and the Sun*, 2021) における語り手であるクララ (Klara) は、人工知能を搭載したロボットである。彼女はロボットでありながら、人間の「心」を理解しようとするなかで、時としてまるで人間であるかのような思考や言動を垣間見せる。しかし、最終的にはその役目を終え、持ち主である家族の家から廃棄場へと移送される。本発表では、ロボットとして行動し、ロボットとして扱われるクララが、いかにして人間を理解し、人間とロボットの境界を曖昧にする存在として変化を遂げていくのかという観点から本作品を考察する。着目するのは、AI ロボットとしての語り手であるクララの独自性。そして、最新型のロボットに対する社会の反応、さらには施術を受けてまで優位性を得ようとする、この世界の子どもと親の関係性である。そして最後に、物語の終盤でクララが運ばれることとなる廃棄場の場面を取り上げる。

第3発表 (13:30 より)

司会 京都大学准教授 南谷奉良

【招待発表】「ビッグ・ブラザー」としての“Tiger”

—ジョージ・オーウェルの『一九八四年』／Haruki Murakami's *1Q84* における指導者／小説家の肖像

京都大学教授 小島基洋

本発表では、Haruki Murakami の小説 *1Q84* に登場する “Tiger” を、ジョージ・オーウェルの『一九八四年』における「ビッグ・ブラザー」の変奏であると読み解く。Aomame が “Tiger” を信じようとする物語の結末は、おそらく、ウィンストンが「ビッグ・ブラザー」を愛するに至る終幕が参照されているのだろう。“Tiger” は、宗教家から小説家へと象徴性を移しながら、その背後に作者 Murakami 自身の姿を浮かび上がらせることになる。主人公 Tengo には小説家としての使命——麻原彰晃の「ジャンクな物語」に抗して「まっとうな物語」を紡ぎ出すこと——が託されているのだ。

あわせて本発表では、英語による Japanese Literary Studies と日本語による英文学研究の可能性、さらには言語と国境を越える世界文学研究のあり方についても考察する。AI 時代において、Haruki Murakami Studies とジョージ・オーウェル研究はいかに接続され、融合しうるのだろうか。

第4発表(14:15より)

司会 京都府立大学教授 吉田朱美

死刑を恐れるドリアン・グレイ

—オスカー・ワイルドの犯罪者表象における社会的制裁への恐怖の導入

同志社大学大学院生 高山蒼馬

本稿ではオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』の主人公ドリアンが画家バジルを殺害後に抱えている不安が、内的で倫理的な苦悩ではなく、逮捕、裁判、処刑などをもたらす犯罪の露見への恐怖に由来するものと論じる。この内的で倫理的な苦悩に苛まれない犯罪者像は、同時代の他の作家には珍しいが、主人公が殺人後に幸せな結婚生活を手に入れる『アーサー・サヴィル卿の殺人』や躊躇しない殺人者としてトーマス・グリフィス・ウェインライトを描く『ペン、鉛筆、毒薬』からも発見できる。しかしこれらの作品では、社会的制裁に怯える犯罪者の姿は描かれず、ウェインライトに至っては流刑後に自由に振舞う。一方で、『ドリアン・グレイ』においては物語の前半においてドリアンが内的な苦悩を克服するというワイルドに頻繁に見られる犯罪者像を維持しているものの、バジル殺害以降においては、絞殺刑などの社会的制裁に怯える新しい犯罪者像を与えられている。

第5室(10号館6階1065教室)

第1発表(発表なし)

第2発表(11:55より)

司会 京都女子大学教授 松原史典

英語の[V at N]構文の意味の広がりに関する一考察

大阪大学助教 田尾俊輔

本発表では、英語の[V at N]構文、すなわち、動詞の後に前置詞 at と名詞が続く表現を扱う。例えば、動能構文の表現である“kick at the ball”や“cut at the bread”は、動作の対象に対して意図通りの結果が得られなかったことを示し、通常他動詞構文とは意味が異なる。さらに、自動詞に at 句が続く表現(例: “look at”や“laugh at”)では、視線の方向や行為の対象を示すことで、自動詞の意味とは違う意味が表される。これらの構文は一見異なるようでありながら、形式的には[V at N]に統一できるため、Goldberg (1995) の構文文法の枠組みに基づいて、それらの意味的つながりを有機的に分析する。最終的に、動詞と前置詞句の結びつきが、意味の形成において重要な役割を果たすことを明らかにする。

第3発表(13:30より)

司会 龍谷大学教授 五十嵐海理

something の記号化に関する関連性理論的考察

大阪工業大学准教授 黒川尚彦

本発表では、関連性理論が提唱してきた概念的意味と手続き的意味という記号化について、something を例に考察する。近年この2つの意味、特に手続き的意味の捉え方が進展しつつある。その契機となった Wilson

(2011)は、すべての概念語が手続き的意味を有する可能性を指摘した。これに対し Carston (2016) は、概念語は意図された概念を含む概念情報スペースへのポインターであり、そこにアクセスする語用論的プロセスへの制約という手続き的意味の可能性を示唆した。something という概念情報に乏しい語でも同じことが言えるのかどうかについて、something の概念的意味と手続き的意味を明らかにすることで、ポインター仮説には再考の余地があることを示す。

第4発表 (14:15 より)

【招待発表】形式的変異現象への構文文法的アプローチ

神戸大学准教授 南佑亮

形式の差異が意味の差異を反映するという同型性の原理 (Bolinger 1977, Goldberg 1995, Leclercq & Morin 2023) は認知・機能主義的言語学において重要な役割を果たし、様々な構文形式の機能的・認知的動機付けに関する研究成果を生み出してきた。その一方で、同一の意味機能に複数の異なる形式が競合しながら対応するという形式的変異(formal variation)現象については未開拓の部分が多く残されている。本発表では、後者の事例研究として英語の“(there BE) no point (in) V-ing” という構文現象における補文（下線部）の形式的変異現象に着目し、認知的構文文法 (Cognitive Construction Grammar) による分析を提示する。まず *The Corpus of Contemporary American English* の調査結果から同構文の補文に観察される形式的変異形(formal variants)の種類とそれぞれの相対頻度を明らかにしたうえで、構文ネットワーク内における構文間関係に基づく説明を試みる。

シンポジウム要旨

英米文学部門 (10 号館 6 階 1064 教室)

偉大な小国イギリス？—大陸からの脅威と大陸を越える覇権

司会・講師	大阪大学教授	橋本順光
講師	東京学芸大学教授	大田信良
講師	同志社大学教授	川島健

シンポジウムのねらい

本シンポジウムでは、イギリスという「小国」が歴史的に抱えてきた脆弱性と攻撃性、そしてその交錯を多角的に考察することを企図している。『ロビンソン・クルーソー』や『ガリヴァー旅行記』といった帝国の冒険譚としてもつぱら注目されてきた小説には、虜囚の描写が少なからず描かれており、そこにイギリスが小国ゆえに抱えこまざるを得なかった海外での捕虜経験が露呈していると指摘して衝撃を与えたのはリンダ・コリーの『虜囚』(2002)であった。翌年にその名も『リトル・ブリテン』(2003-5)というコメディ番組が英国で話題になったのも、小国ゆえの脆弱性と攻撃性は現代もなお有効であるというコリーの主張を裏書きしよう。そこで注目したいのはシェイクスピアの『リチャード二世』における天然の要塞としての英国という有名な一節である。これは 19 世紀には英仏海峡トンネル反対運動で引用され、近年ではブレグジット運動でも言及された。むろんブレグジット反対派は、それゆえに脅威は悪政にあるという後に続く一節を持ち出して反論することを忘れはしなかったが、そのこともあわせて英国の脆弱性と攻撃性が表裏一体であることを示す一例と言えるだろう。

こうした前提をふまえ、本シンポジウムでは、第 1 に『フー・マンチュー博士のミステリー』にみる 20 世紀初頭の帝国の「同化」と「偽装」への不安を取り上げる。第 2 にユーラシア大陸におけるナショナリズムの始まりをウェルズ『新マキャベリ』の義和団の乱の記述から見いだし、第 3 に『ディア・イングランド』にみる戦後イギリス演劇とスポーツナショナリズムの変容を論じる。島国であるからこそ大陸からの脅威に敏感になり、だからこそ大陸への効果的な覇権の確立を図るのは、少なくとも近代以降の英国の基軸であったと言って良いだろう。3 つの事例を通じて、イギリスが脅威と覇権の間で揺れ動き、それが時にどのように反転したのか、その軌跡と構造を明らかにしたい。

英国の不安？—『フー・マンチュー博士のミステリー』(1913)にみるインドの影と擬態の脅威

大阪大学教授 橋本順光

20 世紀初頭の英国は、インドのナショナリズム運動や女性参政権運動など、帝国秩序に対して様々な異議が唱えられていた。Sax Rohmer の小説 *The Mystery of Dr. Fu-Manchu* では、英語をほぼ完璧に操る中国の怪人が、インドの暗殺団サグ(Thug)を彷彿とさせる手口で英国社会を脅かす。彼は、中国の脅威というより、帝国が生み出した擬態のエリートが逆に帝国を脅かすという逆説を体現するとみるべきではないか。当時、インドで高まるナショナリズムについて報道規制があったからこそ、それに伴う不安が中国に集約された可能性を探る。その点で同作が、ショーの『ピュグマリオン』と同時代に描かれているのは注目に値しよう。上流階級に「偽装」するイライザは、言語と階級の越境に成功するが、帰属意識の喪失に悩む。そんな心情を吐露する科白は、おそらくアングロ・インディアンへの不安を背景にしていると考えられるからである。これらの作業にもとづき、帝国末期の英国の「同化」と「統合」、「偽装」に対する不安を読み直したい。

ウェルズ『新マキャベリ』、義和団の乱、ユーラシア—ナショナリズムのさまざまな始まり

東京学芸大学教授 大田信良

本発表は、広義のナショナリズムをユーラシアの空間においてグローバルな観点から考えることを試みる。具体的には、ウェルズ『新マキャベリ』の結末近く、政治ミーティングの途中で起こる火事騒ぎとともに断片的に言及される義和団の乱に注目し、ナショナリズムのさまざまな始まりのひとつとして解釈してみたい。大英帝国のアイデンティティとその帝国主義にかかわる社会改革、国際政治やヨーロッパの戦争についての議論との関係において、ボア戦争と並置されるようなかたちで唐突にテキストにあらわれる清朝を舞台にした義和団の乱はどのようにとらえたらよいのか。中国のナショナリズムの勃興あるいは始まりのひとつとして、五四運動だけでなく、日本も関与することになったこの乱および義和団戦争を見直すことはできないのか。そのうえで、満州事変から宥和政策さらには第二次世界大戦、そして敗戦後の日本の歴史過程を、大戦後の英国に関わる文学・文化と交錯させながら、今回のシンポジウムのなかでみなさんと考えてみたい。

戦後イギリス演劇とスポーツナショナリズムの系譜 —ジェームズ・グレアム『ディア・イングランド』（2023）を中心に

同志社大学教授 川島健

サッカーやラグビーなどナショナルチームの国際試合では、普段はそれほど愛国的感情を出さないひとも自国チームへの熱狂を露わにする。ジョージ・オーウェルやエリック・ホブズボームなどの指摘のとおり、特にイギリスはスポーツとナショナリズムが強く結びついた国だ。戦後イギリスで、チームスポーツを描く劇作が多いのは、そこで強調される集団性と身体性が、階級と人種のアイデンティティを論じる切り口になるからに他ならない。この系譜において、2023年初演されたジェームズ・グレアムの『ディア・イングランド』は同時代の実在のイングランドのサッカー代表チーム監督を描く稀有な作品だ。本発表では、セントジョージ・クロスを背負って戦う重責を、身体ではなく内省によって強調するこの劇作が、スポーツとナショナリズムの新たな関係とともに、革新と保守が明確な境界を失う現代を反映していることに着目する。その上で、政治へと介入するスポーツを演劇がどのように描きうるのか問いかけていきたい。

言語の比較対照から分かること

司会・講師	兵庫教育大学教授	中村浩一郎
講師	龍谷大学准教授	工藤和也
講師	東洋学園大学教授	依田悠介

シンポジウムのねらい

本シンポジウムでは、英語に限らず日本語や世界の様々な言語における言語現象を取り上げ、統語論、形態論、意味論、さらには情報構造の観点からの考察を行い、これらの現象に対する理解を深めることを狙いとする。これまでも、日本語と英語の対照を主眼とする理論研究において様々な提案がなされ、大きな成果が得られていることは紛れもない事実である。その一方で、まだ解決されていない、あるいは統一の見解が出されるに至っていない現象も存在する。

そこで、本シンポジウムでは、構文交替、述語の名詞化と項に関する関係、あるいは焦点表示機能に焦点を当て、英語あるいは日本語を主軸としながらも、世界の様々な言語における現象に焦点を当て、経験的データの提供、及びそこから考えうる個別言語の特性解明や言語普遍性への理論的貢献を提示することを目指す。

構文交替の日英対照から分かること

龍谷大学准教授 工藤和也

構文交替とは、同一の動詞が異なる項の具現化のパターンを示す現象であり、語彙意味論の分野では、これまで英語を中心に多くの理論的研究が行われてきた（この分野における包括的な整理としては、Levin and Rappaport Hovav (2005) を参照）。しかし、英語において観察される多様な構文交替現象を、対応する日本語の例と比較すると、英語に基づいて提案されてきた理論が、必ずしも日本語にはそのまま適用できないことが分かる。

本発表では、使役自他交替 (Janet broke the cup./The cup broke.)、場所格交替 (Jack sprayed paint on the wall./Jack sprayed the wall with paint.)、与格交替 (John gave a book to Mary./John gave Mary a book.)といった代表的な構文交替現象を取り上げ、日英対照の観点から比較検討することで、構文交替に関する両言語の共通点と相違点を明らかにする。さらに、これまで英語を中心に構築されてきた構文交替の理論を、日本語の考察を踏まえて再検討し、理論の修正や拡張の必要性を論じることで、言語間比較から言語の普遍性と個別性に関する理論的示唆が得られることを示す。

述語の名詞化と項の出現に関する覚書

東洋学園大学教授 依田悠介

述語の名詞化が適用されることにより、項となる名詞句の出現の可否や格のパターンが変化することはよく知られている。例えば、項に関して言えば名詞化された環境では動作主となる要素が出現できないことが

指摘されている（{*his/the} gift of Mary of a Fiat vs. his giving Mary a Fiat.）。他にも、格標示に目を向けると、日本語や英語の主格や対格は名詞化の環境下では出現できず、名詞句は属格として標示される（太郎が本を書く vs. 太郎{*が/の}本{*を/の}書き方）。

これまでに主格や対格に関する研究、そして、英語と日本語のそれぞれあるいは、それらの対照研究は比較的熱心に行われていると考えられるが、英語と日本語以外、また主格・対格以外の格標示に関わる研究はそれほど多くない。本発表では、観察する言語の幅を広げ、また現象の幅を広げることで述語の名詞化と項の関係について見えてくる言語普遍性・言語理論への示唆的なデータおよび考察を提示する。

焦点表示機能の通言語的比較対照から分かること

兵庫教育大学教授 中村浩一郎

グン語には以下のような主題・焦点表示辞があることはよく知られている。以下の文で *yà* は主題を表示し、*wɛ* は焦点を表示する。

- (1) Náwè lo yà gbákún étɔn wɛ é dɛ
woman Det Top hat her Foc she remove
'As for the woman, she took off HER HAT.'

また中国語では以下のような文においてコピュラ *shi* が焦点表示機能を持つことが知られている。

- (2) Shi ni-de t aidu gongsi-de laoban bu xinshang
Be your attitude company-DE boss Neg appreciate
'It is your attitude that the boss of the company doesn't appreciate.'

更にベトナム語でも同様の焦点表示機能を持つコピュラがあるという研究がある。

一方、日本語では助詞「は」が主題を表示するといわれてはいるものの、「は」以外の助詞が主題を表示することも可能である。一方、焦点表示に関しては様々な研究があるものの、統一した見解があるとは言えない。本発表では、上記の言語を中心として焦点表示機能の比較対照分析を行う。

大会準備委員

委員 長： 西谷茉莉子（京都府立大学）

副委員 長： 合田典世（京都大学）

英文学部門委員：

合田典世（京都大学） 西垣佐理（近畿大学） 西谷茉莉子（京都府立大学） 吉村征洋（龍谷大学）

米文学部門委員：

高村峰生（関西学院大学） 出口菜摘（京都府立大学）

英語学部門委員：

五十嵐海理（龍谷大学） 松原史典（京都女子大学）

開催校委員：

齋藤安以子（摂南大学）

（五十音順、敬称略）